

江川 義雄 著

『広島県医人伝 第三集』

江川義雄さんの広島県医人伝第三集がこの度出版された。先に第一集、第二集が出版されており、第一集には古くは吉益東洞、土生玄碩、仲井厚沢、星野良悦などや明治期から昭和始めに活躍した、呉秀三、富士川游、永井潜等、広島県を代表する多くの医人について書かれている。第二集は第一集にもれた明治期までの広島県医人伝であり、どちらかと言えば医史上あまり著名でない医人についてもその業績が書かれている。

この度の第三集は広島医学百年について、医史学をひもたく者にとって大変興味深い著作で、近世の広島県の医人の功績を偲んで書かれたものである。百年補遺の八編が主なものでその他は江川氏がおりにふれ書きとめた広島県内の医史学のトピックスに関するエッセイが集められている。八編の補遺は平成八年が広島医学会の前身である芸備医学会創立から百年にあたる年であるので、これまでの広島県医人を回顧したものであり、その最初の稿には東大精神科創成期教授の呉秀三が、学会発会に際し芸備医学と命名したこと、第一回の学会には富士川游と共に医史学の研究の発表が行われたことや、芸備医学の運営、行事は尼子四郎、三宅良一などが、関与したことが記されている。

広島県呉市は戦前軍港として栄えたが、呉に来た海軍軍医

達の着任の記録もあり貴重な資料でもある。官立の病院としていち早く出来た県立広島病院で歴代病院長の果たした役割についても記載されている。併せて県病院医事集談会の開催状況として、明治四十五年から、昭和八年までの演者、演題も収載されている所も面白い。

その他縦書きの芸備医事第一号(明治二十九年六月十二日発行)がそのまま載っており、当時の学会誌をかいま見ることも出来、江川義雄氏の広島県医人伝は医史学に興味を持つ人達にとって大変有益であり、また興味つきない著書である。

列伝の中から一、二を拾うと、星野良悦は広島県において最初に人体解剖を行った医師で、寛政三年刑死体二体より骨を取り出し、これを彫工に桐の木で模刻させ、極めて精巧な木骨二体を作製した。杉田玄白、大槻玄沢などがこれを見て賞讃し、一体を幕府に献上することを勧めた。現在、広島に一体が残存し、これが広島大学医学資料館に保存されている。尼子四郎は夏目漱石の隣人であり、しばしば漱石も診てもらった医師として有名である。「我輩は猫である」の中にもその様子が出て来るだけでなく、医学中央雑誌の創立にたずさわってこの刊行事業が医学会に大きく貢献したのである。

江川義雄さんのライフワークのこの書に広島県の医史学の徒として、私は心から拍手を送り広く皆さんに読んでいただきたく思うのである。

なおこの書は江川氏が二度の手術と御夫人の急逝を乗り越え出版にこぎつけられた書であり、御夫人の手描きの花のカ

ット図が区切り区切りに配置されている。

(原田 康夫)

〔私家版、広島県廿日市市本町五―十八、平成十四年八月二十日、B六判、一六八頁、非売品〕

青木 正和 著

『結核の歴史』

この著作を読んで今さらながら思ったことは、疾病史は自然史ではなく社会史であるということである。また当然のことながら、疾病史は医学史と切り離して考えることができない。医学の歴史は疾病を認識し、これを発見し、それに働きかけて変容させ、変容させたものにまた働きかけ、終りがないようにすら見える。

この本の副題が「日本社会との関わり、その過去、現在、未来」となっているのもまた当然である。世界には膨大な結核の歴史に関する文献があるが、本書は日本の結核の歴史を中心として書かれている。わが国では結核の歴史に関する本はあまり多くなく、その意味からいっても貴重な本である。

著者は一九五三年に東京大学医学部を卒業し、その後一貫して結核診療の道を歩み、その五十年の苦闘の跡を踏まえて書いたこの本は重みがある。

結核病の歴史は古く、近年の考古病理学の成績によれば、

紀元前数千年のミイラや骨などの遺物にその痕跡が認められるという。文献的記載では、紀元前七世紀のメソポタミアのアッシリアの粘土板文書で肺結核と思われる記載がある。また紀元前五世紀頃のギリシャのヒポクラテスは結核を *phthisis* という病名で、四二例の病歴を述べ、そのうち二五例が死亡したという。

phthisis は消耗病という意味である。これに対する英語は *consumption*、ドイツ語は *Schwindsucht* と呼ばれ、中国及び日本で労働などと呼ばれたのも同じ意味である。肺の病変に注目すれば *phthisis pulmonis* と呼ばれ、中国及び日本の肺病、労咳などはこれに相応する。またこの病気の伝染性は中国で古くから認識され、伝屍労とも呼ばれた。平安時代にわが国で中国医学を紹介した『医心方』は編纂書であるが、伝屍労も載っている。

わが国での結核病の歴史として、著者は最近の考古学の成果により、西暦紀元前後の弥生時代から五、六世紀の古墳時代の人骨にカリエスが認められるので、この頃大陸からの多くの渡来人とともにこの病気ももたらされたのだろうと推測している。

また日本の文献記録時代に入ると、著者は先輩の岩崎龍郎氏の説として、『日本書記』に記載される天武天皇の晩年の体調不良の経過から「結核の疑いあり」ということを紹介しているが、これは論拠が薄弱と思われる。

平安時代の清少納言の『枕草子』に「胸の病」というのが